



人達 18
1278
14



朝夷巡嶋記全傳第三編卷之四

東都 曲亭主人編輯



中輯第廿七

鸞鳳の日蔭花
副將の晦之月

信夫莊司元晴のその日より義邦の動静云為を試るはは辞寡し之信
 あり才高しと邪か加を以ての容止美麗わりと傳多りあるべくもわらねば
 ありろよふろく愛敬いく程もあく廣光は媒介とせるその孫女芭姫と
 義邦は妻けりさればこの芭姫と交えし入実八前伊豫守九郎判官
 義経の息女之往時文治三年高館の城中ゆく生れあひたをて判官
 五年閏四月晦日泰衡が野心はあり高館の城攻られしと死判官ある
 妻子を刺殺しその身も自殺しある程は元晴竊は件の姫人を救ひたり

妻もも侍嫁一の良も自嫁一の野子に静籙お丹の殿へも妹へも
正平閏四月朔日泰極に理心も高論の妹女も
義経の息女に卦部文が三年高論の娘中も生も
義経も妻に
高論の娘中も生も
高論の娘中も生も
高論の娘中も生も
高論の娘中も生も
高論の娘中も生も
高論の娘中も生も
高論の娘中も生も
高論の娘中も生も
高論の娘中も生も

東階 曲亭主人誌

陣夷遊軌信全軒策三融卷之四

その晦日下野を進發し白河より進たる軍兵無慮三千餘騎副
將軍時夏の華や物の具しく太逞に死馬も乗り一千餘騎を引卒
あゝ先陣は拍せりとの為体ゆるり四下を拂くんえは義兼ハ
日はゆく五六里のち後れて来る味方を待つ十月八日は國府の城
宮城郡に來著して兩三日人馬の足を休めあやぐ地理を向敵の強弱を
考ふ程は信夫莊司元晴が老黨城戸三郎守詮來會して元晴が
口状を述べ義兼則守詮は郷導せむ遙に江刺郡もとうむせ
鎮守府のやうある膽澤の神の社頭は到り祈願のりあがく要害の
地は陣しこの處膽澤郡と境をかへる経任が盾籠る平泉の柵は
速く當下義兼ハ諸將を聚會し軍議を疑り賊のうら寄きを
俟く戦ふ利ありん攻進して攻る利ありん攻と吏の異見を問れり



城戸守詮

時夏
騎
守り
軍
折
議
と
く



高階兵衛

田重

寄居るを俟んとすありあり。進んで攻んとすありあり。衆議區の
 一決せし義兼遙未坐あり。城戸三郎を召近つけく。汝の當
 案内より攻ると守ると孰れ利ありん。まればく修羅五郎経任の幻術あり。
 雲を吸ひ霧を起し人の耳目を迷はといへり。この虚言欺実更欺と
 問れて守詮さし兼任が撃れ。比経任甫十五歳若鷲山は逃れ
 有一日異人は邂逅し左道の術を習ふと三年是よりより里より
 幻術をりく愚民を迷し竟は逆乱とありといへり。又経任は四人の賊
 将あり。神井猛虎字の鬼六鐵盾重連字の矢藤五环浦方相守五十六
 蘇途暴道字の鶴東二須弥の四天は擬する兇惡無慙の癖者あり。
 この他賊將をほあべし。あられども烏合の惡黨陣法をあるは御陣を
 些退けく八幡林を前し當ある軍兵を隠し置く賊の来撃を

引つけ軽く戦ふく敵を驕らせ伏兵をりて後陣あり。さうく
 攻むに任る幻術も行ふ暇なく一挙して擒ふ急は柵を攻むをぬら
 賊徒脱がれをり力を勤せ志を同うし防禦の際にたるとは速に落
 べり。寄居の退屈はを窺ひ或は夜撃或は朝懸出沒不測の手段を竭
 する御方の勝利はいつか。後時日を送りて兵糧乏くならしむ。六
 けり大まきよのやと憚る所も各答へく義兼頻りさうあ頭後人と
 初め氣色よく左右を信とえ之れが刀野太郎声を激し守詮汝何物かれば
 無用の舌を動さ陣中よ敵の勇を説りの大將の志と平家富士沼の
 敗北も彼齋藤実盛も無用の辨はあはく。搦まは経任兼幻術ありといへり。
 原身小児の戯れのみ大兵下む城は臨み身を脱すは暇ある然るを況
 幻術をや既に武命を奉る二毛上毛の大神當國の御方をぬくこの処

おどく寄せあぐらうのあご城を攻む。陣を移し退く。其の臨み不言。時夏
 不肖なれども副將軍を辱せしむ。田舎侍の臆説。其の懼し。賊の英
 氣をばつとせんとや傍痛し。冷笑し守註。その言の行れざるを遂に
 再びのいづこ面目を失ひく。舊の席は退け。時夏ハ惣大将義兼ハ會款
 をく。あれ某が一隊をり。柵を乗取らん。本陣を進られ。御方の英氣を
 資ぬ。勝利疑ひあり。義兼ハ執權の由縁の故。この年来扶持する
 時夏が恩免を蒙る。副將軍ハ拜任せられ。鎌倉より退り。時夏
 内意あり。渠初陣のより。あれが貴所の扶助。よ。功名を取り。こ
 ゝん。このあちをぬく。と消息は。いづとも。か。も。時夏ハ
 軍功あり。せん。と。あ。あ。今。その大言を。莞尔と。う。笑。勇。あ。れ。
 勇。あ。哉。や。計略。と。い。も。賊の柵を。矢の一條。射。け

ぞ。く。この。退。賊の英氣を倍。の。義兼ハ後陣。續。攻。一。攻。
 部。く。と。愉。許。せ。時夏ハ欣然。と。わ。の。陣。立。軍兵の
 進。平泉の柵へ。寄。程。惣大将義兼。二千餘騎。三隊。備。馬を
 進。是。先。経任。の。追討。の。大将義兼。時夏。二千餘騎。引。卒。
 ぞ。江刺。まで。推。寄。せ。来。つ。鎮守府。ハ。屯。と。注。進。擲。の。齒。を。挽。も。些。も
 駭。ぞ。領。く。の。股。肱。の。賊。將。神。井。鬼。六。鐵。盾。矢。藤。五。ホ。と。召。近。つ。け。義。兼。ハ
 名家の子孫。ま。熟。る。老。黨。も。多。切。く。且。沈。重。め。思。慮。あり。と。受け。ハ
 悔。り。が。た。敵。あり。但。時夏ハ。黃。雀。の。を。貪。り。啄。く。飽。と。を。た。た。ま。れ。
 早。蠅。五。頭。平。と。と。渠。を。引。入。せ。れ。も。五。頭。平。果。敢。を。く。生。拘。れ。れ。く。
 遂。よ。その。成。ら。ざ。れ。バ。今。度。の。戦。ハ。時夏。が。副。將。と。る。ハ。則。味。方。の。幸。之

され既に謀を設置つ鬼六へ五百騎をぬく泉川のさあたる陣して敵の
 川を渉をえんばその中流に到るを撃つ矢藤五へ三百餘騎をぬて竊に
 川上へ趣た暗号を俟て堰苗を泥る堰を一度に断り落せ敵り
 疑なく泉川を渉るに罵り辱しめ怒せよこの他の進退機は臨み
 変り應じて欺引を時夏を生拘るべし渠を擣ませ義兼を敗ん
 と石は卵を擲より易うりまかせよか説示せば鬼六矢藤五領掌し
 ちのく賊兵をぬく柵をせりる程は刀野太郎時夏が一軍泉川の上へ
 到る前面を信とえまを六賊兵は四五騎河原面よりちあさり
 時夏うち見ると冷笑ひされべしとてさりとらる異めと賊はいつく小男
 ち河水も亦浅やうなれば膝の上を過べり衆皆渉せと下知されは
 城戸三郎諫めりいあう賊は小男はえられども戦ひを持らる別は謀あり

あるべし且この川へ恒は水高く流急なり況や雨後のことなれば水波の
 増へるは俄頃淺瀬はありさる不審し後陣へ謀ト合させて後まを
 いせもあへば時夏呵くと冷笑ひ和殿へいつく臆しちあられは其許の
 郷導をこのまに如此に後陣は退るを大将は注進せよとて焦燥
 めぞ守詮へは勢をぬく臆く後陣は立ちり云々のすを告りうは
 義兼笑く眉を擡め守詮が異見ともあへし時夏は血氣を乗
 ちく川を渉るに過失あらん速に禁めよとて老黨糠田重正を遣りて
 時夏はそのころをほとせ又城戸守詮は軍兵三百騎をちかえ敵の堰
 ちることもゆとて遙は川上へ遣りてかうし程に重正は馬を先陣に乘
 走りて時夏は對面し大将の背を迷りて叮嚀に制りて時夏はさひ
 うのく前面を睨み扣る賊將鬼六猛虎へ寄るの川を渉るを

足く声高れめをせり。かたは罵らせ或ハ馬より立ち立く沙石の
 上子臥もあり或ハ尻をこりへ向く打て死つ笑もあり傷者無人の為体は
 時夏ハ怒はぬ堪ば介殿左馬介あまりの速慮し辱らるることかたし
 烏合無慙の逆賊ホダいのをくの謀をまひて必き彼襲撃散らせしと
 敦圉マ真先ハ馬を進めく川へ颯と乗入れり相後ハ早雄の軍兵四五
 百騎食後まど川を涉はるひより浅うなれば後れりもの
 逸足ハ水中に立ち立く浩如ハ敵の陣後ハ一声の筒音響はる
 一道の烽燧閃たける程をあれ川上より断落は水忽然と激流して
 疾と矢のどく人馬の足を衝倒せば中流は漂へる五百餘人ハ推
 流され先ハ進ハ兵ハ辛く向の河原ハ政登るは此二百餘人待儲る
 敵兵ハ射倒さる斫伏られ生くかへるけり。中ハ時夏ハ馬の

平首ハ抱枕著後卒矢塚達六ハ主の馬の尾をくつかうまき流さるごと
 十町むらり敵の抓子棒ハ懸られ主後共ハ阿容と沙上ハ引上られ
 懸てぞ索を掛られける先陣墓を敗れり。とそむく後陣ハ文えハ六
 義兼これぞ救んとく頻るは諸軍を進めり。刀野主後ハ生物られ
 急流溢瀆りく涉まべくもあざれば只管空箭を射りたるも亦見せへ
 ありり。當下神井鬼六ハ鞭をりて義兼と兩三ハ招けバ衆賊
 咄と笑ひて勝閑ハ揚生物を牽立く徐と退く程ハ寄りの士卒ハ
 眼を睜り巻を捺りて眺とる義兼怒氣胸ハ満くあつども大息吐
 時夏漫ハ血氣ハ早りて軍令を用ひむ味方の士卒を影撃せそその
 身も擒せられり。刀野を救ひぬむハ北條殿ハ何とりのあべき
 この川堰る水あまハ落さとも速あらん日あハ柵を攻破りて時夏を

救ふべし。こゝに血氣の着武者は、愆れに後悔し、鎮守府を退く程に、城戸三郎守詮は、川上は到らぬとも中途おしと水原の敵項増を、先陣川より入り、敵の謀は陥つらん、今ハ、甲斐、其処より陣所へ還り、案下某生再説、修羅五郎、經任ハ、神井鬼六、鐵盾矢藤五、ホグ注進、遅しと俟程、果しく鬼六、猛虎ハ、時夏主後と、擒み、矢藤五と共、帰陣して、勝軍の支の趣、巨細は告ぐ、經任は、歡び、二人を勞ひ、迺衣裳を更、牡丹花の間より出、經任ハ、四天王、珎浦五、五六、蘇塗、鶴東二、神井鬼六、鐵盾、矢藤五、この他の賊將十餘人、身甲しく、大刀を帶、戟を執り、その左右に侍坐し、又庭上、武器械を樹立、弓箭を取、賊兵二百人、齊くと、隊伍を乱さ、整として、列をかき、かき、五七人の賊卒、時夏主後を縛め、

大床の下に牽居り、經任これと信と、渠の寄の大将、欽何と呼、そのゆるんと、あるは、良は、向し、神井鬼六進、と、出、將軍も、豫より、その名ハ、知食、う、え、渠の寄の、副將軍、刀野太郎、時夏あり、と、告、經任、す、あ、慌忙、死、み、づ、り、立、時夏、う、ち、對、ひ、づ、り、た、り、か、力、野、野、し、れ、豫、く、和、殿、の、人、と、身、を、傳、景、慕、の、思、ひ、己、ご、く、竊、五、頭、平、を、り、愚、意、と、か、よ、へ、せ、既、好、と、結、び、此、度、寄、は、あり、とい、と、思、敵、の、あ、ひ、と、な、さ、に、内、應、せ、る、べ、う、ん、とい、憑、く、存、ぜ、よ、と、が、士、卒、誤、く、矢、を、射、う、け、刃、を、お、え、刺、擒、み、せ、ハ、慮、外、の、失、礼、慚、愧、を、堪、は、し、舊、交、と、忘、れ、は、許、し、あ、と、う、ち、勸、解、く、臆、く、そ、の、傳、を、釋、し、の、せ、携、り、上、座、に、誘、引、へ、鬼、六、夫、藤、五、これ、を、と、遠、く、席、を、置、不、意、の、合、戦、を、賸、話、ま、り、時、夏、ハ、あ、ひ、づ、り、助、命、せ、る、と、あ、り、た、その

管待等閑あり後且愧且疑ひて賓席より著け袋を被りし
 猫の如く顔をつ死尻を叩く一遠巡せのこまれば任任遙く達六を指さして
 渠へ何者ぞと問ふ時夏これとんくく其腹心の家諫よめと答れば
 うち領だく又達六が樽を釋放させくぬのがし主の後方よゆりせり
 當下時夏やをくよ奉る顔の汗を拭ひ其豫く將軍の尊意せあり
 ざるよわらざれどもいふせん赦は擇まされり副將の大任脱れがく陽子
 武命は應じりてさづれ某戦ひはありあられらち負く既し擒あり
 ころを許さるのこめを賓主の礼りてせらるる再生の恩知己の幸
 何の欲これよおん用ひらりとわぶ筋を断骨を折り天馬の勞と
 盡まじ貳あくゆと誓と立ち媚く任任おく歡びて既しいへり
 ごとくめく則し王が幸ひ之席を更めく勸盃せん誘ふと先よ立ち後

堂は伴ひの新衣裳をせり濡ら衣を脱更させ賓主の坐定あれは
 準備せしころけんを艶妖多婢門十餘人よみく盃盤を捧げ美酒
 佳肴を按排べく時夏は勸めく盃はあつたあつた順遠らし
 逆よ返し既し半酣よ及ぶ死歌妓ホ声妙よ歌ひ奏はる管弦ハ鄙やわ
 あれど趣あり仙國ありといひ地陵頻加めくいと愛と一浩処よ年紀
 二八ありあり白拍子水干よ烏帽子しと扇を閃して舞せりこの任任が
 妾あり陸奥一二の美人とせし文字搦といひ淫婦あり時夏は既しよその
 艶曲をせし心耳を蕩し又この歌儂を觀て魂天外あり文字搦は花の
 顔ハみり野の春も敷か又嬾やう柳の腰ハ安積の来女ハ及ぶ
 べし文字搦儂く左よ遠れば時夏が晴左はあり文字搦はく寄
 れば時夏が晴右は在りこの時めく人よのいづをあつた持る盃の

傾くと覺む歌舞ハ三曲めり果し六経任ハ文字搦を召び粟のせき。
 をく酌を執らる程は時夏酷町して泥の如し又板刀野が家諱矢塚
 達六とも主の所用をうけあられとく間近くゆせくその饗膳主の
 時夏は異あつとやかくて経任ハ時夏主後を誘引くあつ土庫は赴たつ
 金錢財宝の多妃をんせく軍用は乏しかざるを示し又膨建つたあ
 倉廩は趣く山の如く積上る兵糧は数年の貯あつを示し又兵庫は
 赴たつ武具矢種は富るを示し又衣倉は赴たつ倭羅錦綉の多妃を
 示せば時夏主後の觀毎は嘆賞し往時六郡の主より一泰衡按察使の
 富といふこれあもべりくほどを稱るわたりし程よその日も暮まれば
 経任ハ燭を續せく夜燕を催し更闌く主客酔を盡し各臥房ふ
 入るよ及びなやも時夏を釣んる冬之夜長た頃あれば寤寢の間ふ

せられよとく彼文字搦を遣しなれば時夏忽望と足りく十二分の歡び
 あり又文字搦ハ経任が密意をゆらものかれが飽あもよ婿を献し
 小鹿の角の束の間もさあさといひ私語は時夏あもく現を脱し身皮
 あくハ體を合せん死かばあや日同穴は蓋らんとを契りる既中く第
 三日の曛昏は経任ハ時夏を閑室は招たつゆあうが志願空ううく
 和殿は對面せり日よりあもく捨ざれ思あり願あ永く苗りて富貴を共
 受あへりや鎌倉は帰奉るも頼家暗弱めく政事は親も代時政
 父子をうく外威の威を逞く一黨を樹推を弄びて喜怒賞罰のがあ
 中この故は喜ぶと死ハ功あれを賞し怒ると死ハ罪あれを罰せり彼
 暗君は仕へ彼賊臣の蔭よあらんハ石を抱たつ淵は臨み薪を負わく
 火よ近つくより特は危死りやあれどもかへり去んとあつ強て

苗人とあつた。抑任不肖あつても厨川は義兵を起さう戦へば
 捷攻むれば取る膽沢より北のこの外の濱に至るまで悉皆とが有あり。
 進て敵地を畧し退るの自國を守り進退出沒自由をぬらう加旃
 るれ亦一術あり雲を起し風を喚び草木をりく士卒と一瓦石を
 撲く牛馬と及在鎌倉の大小名貞を竭し推寄来るともそれ只
 屑ともせぬこれえぬへといひけく口は咒文を唱れば一衆の黒雲
 経任が頭の上よ天靡降りて暫時姿を隠ししり時夏の幻術は呆れ
 惑ひくおそれ敵ひ速愛され妙術ありけ寔は將軍の天の作る
 英雄よしをさつをあれ某故郷は妻子もさし誰が為る富を辞して
 鎌倉よ還ることを願んや只このあても君よ仕へる死をりく恩は
 酬へし疑ひぬめいと久といふは経任術をおさめく依然としく

小膝を進めあつらんその義兼を撃つるさういと易くり和殿主従
 今宵寄るの陣よかへく筒様くは説ぬへ明日義兼推寄せ
 来くはばその時へ云く之筒様くは巨細は謀を密語は時夏はく
 感佩しこの謀究りく妙にあつぬえと異議なく領掌あつり
 久経任あつて歡びく更は酒宴を催したり折しもあれきのあつり
 水枯の風吹暴れて木葉を飛し枝條を鳴らしく物の音のあつり
 ぐは猶且宵闇ありればよろづは便あつりその夜の左側は
 時夏主従の舊の鎧下なり衣は被更く経任は辭し別れは
 ちと死は文字揃は時夏が袂は携り泣流るる雲時の名残は
 ち。これも亦丈夫のあつる釣人と竹の輪あるさうかくて件の
 後門より走り寄るの陣へ赴く程は時夏の連六は被謀を説き



とらふいけと
時夏生拘
られ経任
了降る

草子

明

経任は一味して寄るを破るが可なり。又左典廐をりて実を告て
敗軍の咎を贖ふべき欲汝があらう。いと問へば、連六院吟じ
項日平泉の為体をえいよ士卒勇猛中々大将智謀は長うか
軍用兵振乏しくねば攻むとも落べりて君の寄るの副将と
一戦は数百の士卒を失ひ贖擄せられ、逃る陣所はかへりて
平泉の柵破れど何と功とせられ。幸ひぬく異あるを
鎌倉よかへりあかとも本領徳は三千貫経任は従ふと死の富貴歡樂
疆をこれとめりて心は擇とぬと答たり。時夏ゆくうち点頭
これも如此思ふ寄るを謀るの易く実を告るの却難う。人生
徳は五十年犬馬の齡を貪りて區く人の下よとらんや寄る敗れて
逃くへば修羅軍威のちもく振りて奥羽に敵はあつらんか

その由断を窺ひ経任を殺し柵を奪バ奥六郡ハマが有るべし
よや其所もぐあつたとも文字擧を柵に遺しおたぐられ又寄
るの陣はあらんや努此彼は曉られか秘よ秘よと密語つ主従齊一
直走しくその曉くは鎮守府寄るの陣に立ちて云く門
けり。この死摠大将義兼へかほ臥房はあり時夏主従かへり来れ
よを先討りて後には歡び聽く起出く衣裳を更衣召入ま
對面は程よとや天の明たり義兼の床几をわわく刀野生急死や
是へくと招たれは時夏膝行頓首しとておろく進み近う某
只管血氣は早りと軍令を用ひて敵の謀は當られく影の士卒を失ひ
主従二人擒せしむる武恩を忍諸もよこの辱めはあへりて願は
面目かゝるれとも禍福の糾纏の如し始終の勝つを勝りぬ某擒よ

せられ一故不憶便宜をゆえ一挙一と経任を討滅さん
 事とのゆを義兼守あへばそのあべいとも和殿主従い
 あり輒く脱れ来つるを向の時夏莞尔と笑されば
 あれ某主従獄舎に繋れ脱るべくもあらず一は
 元来泉三郎忠衡が小卒あり古主忠衡の泰衡は
 親兼任に殺されうあ故ふう経任を怨むといへとも勢ひ已とせ
 ぬぞ駈入られ平泉の柵中ありといへうあをわく某を竊
 憐むと舊識の如きゆゆ傍人あり時夏は密語を
 られ翌の夜和君主従を放遣るべし寄るの陣へう去る
 柵を攻させぬへこの柵西の城戸の峻坦を頼く守兵甚
 るバ火を放て西の城戸を開くべし大軍其処ありう
 東の攻む

あき敗れつべしかく経任を擒せんと袋の物を取
 まああかといへう某は其許の謀佳妙といへとも
 その誓必内辺に及んその身罪人とあつた誰が火を放
 ちつらあ難せは彼人笑つるその心たれそれと志を
 切らうは友二人ありそれ亦罪を脱るの謀ありあ
 説諭しつかく昨の宵風を暴りつるは紛れ獄舎を
 涉りかき来り哀れ御勢を向せ平泉を攻め某一方の
 受取り柵を枝た敵を慶め先日早り敗軍の愆を賞
 この一挙よと真しやう告ぐ道義兼欺れその歡が大
 かく夫然ると死の寔は天祐神助に更成らばその軍功
 ありと丁寧は勞ひつこれの當坐の勸賞とく鹿毛の馬
 雲珠

鞍置るを牽立させく贈りし時夏は拜し受く帷幕の下へ退地なり。

中輯第廿八

平泉役の敗北
假賢人の救書

かくく足利義兼ハ老黨高階兵衛師勝糠田八作重正ホを招て
よせし敵ハ内應のめれあつてを説示し諸軍兵ハ時夏が脱れ帰
るるや告させ直進泉ハさうち涉し平泉の柵の前後に城
戸を稻麻の如く囲せし短兵急攻するをそれハ賊後ハ矢種を
惜まば差詰引詰射る程寄るハ些射あつたれ盾を被た
聞たけり業内知るるがこれの日も時夏先鋒さうかしてあ
ふあれハ猶も大将義兼を欺る功を諸軍ハ譲ると林し
隊勢を牽く轉くと東門ハ攻蒐れば大将義兼の二千餘騎ハ西の

城戸をぞ攻さうけりかくくその日ハ暮れども敵ハ返志のめれあつて
この日も時夏先鋒さうかしてあふあれハ猶も大将義兼を欺る功を諸軍ハ譲ると林し
隊勢を牽く轉くと東門ハ攻蒐れば大将義兼の二千餘騎ハ西の
射る落を孰し隙ハあつりけり浩処ハ柵中ハ火光發く賊兵佯項ハ
騷動を事の紛れハ内より西の城戸を開たし義兼これを
信く見く兵共進めと麾うち揮く後れしものを駈立くその時
馬を乗入れりあつても敵出あは是ハいづく疑惑ひく退ゆと
散動はよんえつる火光ハ倏滅く城戸ハおのづから破と鎖陰くと
あく黒雲起り風亦颯と吹暴れく石を飛し樹を倒せ寄るもの
兵これハ撲まて死はつもの數十士卒のゆく途を失ひく同士を
あく疾を被り轉つ轉つ柵擇をそが中は高階兵衛師勝を主と

守護一とく処を去らば、糠田八作重正の城戸のほろり馬を乗せえ
 人々を根根とて城戸へこめてはあつたものを力を勤めて打破りし
 打砕た扉を推つ一崩れ退れんとし、程は忽然として耳辺は鯉波
 天地を動し、右のうごまり、鬼六鶴東二左のうごまり、五五六夫藤五
 正面より賊主経任猛卒をこえ、二千餘人四面八方より起立し、矢を
 射つると、雨のごとく、義兼を撃つと、異口同音は、つて當り、隨
 破倒せ、夥多の敵をたゞ屍の横り、等を乱し、血の流れ、
 盾を浸せり、吐嗟、大将義兼も、撃れつ、くんと、を師勝重正命を
 限り、防戦、あつ、主を救ひ、やうをく、走り、ゆを、賊後、の、脱、し、
 とく、透間、も、あつ、追、蒐、れ、ば、糠、田、重、正、踏、苗、り、近、つ、く、敵、を、撃、破、り、

あつ、く、ハ、禁、ぐ、め、の、う、数、ヶ、所、の、深、狭、は、勢、ひ、竭、く、神、井、鬼、六、は、
 撃、れ、よ、り、か、り、一、程、は、義、兼、ハ、百、騎、足、ら、む、は、撃、れ、十、町、あ、り、
 延、ら、る、を、東、の、城、戸、を、陽、攻、せ、し、刀、野、太、郎、時、夏、ハ、兵、駈、馳、立、く、そ、の、
 口、先、を、遮、り、苗、の、義、兼、脱、る、路、ハ、降、参、せ、り、と、呼、れ、ハ、義、兼、主、後、
 大、兒、は、怒、く、恩、は、致、く、極、悪、人、天、罰、を、ひ、ち、と、世、と、敷、圍、あ、ら、ば、又、と、う、ち、
 振、り、咄、と、嘯、く、破、立、れ、ば、賊、徒、ハ、颯、と、披、れ、あ、は、せ、引、包、く、攻、り、け、り、
 い、と、も、烈、し、死、戦、ひ、は、寄、り、の、士、卒、ハ、過、半、撃、れ、く、義、兼、僅、は、十、四、五、騎、
 路、を、棄、く、逃、れ、れ、ば、時、夏、一、騎、味、方、は、先、に、馬、を、馳、し、く、追、懸、
 程、は、信、夫、莊、司、元、晴、が、名、代、城、戸、三、郎、守、詮、ハ、時、夏、は、
 後、ひ、く、東、門、を、向、ひ、は、刀、野、が、野、心、あ、つ、と、が、隊、兵、を、一、処、お、
 纏、め、く、竊、は、変、み、備、へ、し、西、の、城、戸、の、寄、り、敗、れ、り、と、あ、り、

鯨波大は起り雜兵の叫声もよらるごとくひえたり當下時夏ハ軍兵は機密を告忽地備を建更しく逃る寄よを追蒐れば賊後時夏を資んとく柵を開け走り守詮ハせんまか陽の同意はありして時夏が後は跟地焦火影照らせそく十町あり追ハ程は廿一日の月如く故ととく白昼の如しとんれば敗兵十四五騎大将の前後は立らく江刺のくへ敗走は間迫は隔れども隈の月光の光を隠るべくもあざれば時夏ハ諸軍は先と蓬一かへせとぬけたり。城戸三郎これとそく馬は拍を乗走り賊軍を馳離れそや時夏は近つく程は弓箭刺めく声あり立返賊時夏誰をう追ハ城戸守詮あよあり箭一條受よとぬつとくんうの処を伴と射る矢来些速りなれば袖隠の間より隅を射削り時夏怒る些も

擬議せば馬の平首牽向は馬ハ二の箭は曾を射られ狂ひもあむ輾轉び主の控と反落さそく。あづく起もほざりし。守詮臆く寄せあはせく首を取んと進む処は時夏が家隸矢塚達六後れ走り来つ薙刀をりて守詮が馬の足を薙倒せば主の馬は乗あがり地上は礮ととり伏たり達六ハ透間もあく薙刀を晃しく掛んとれば守詮ハ弓をりて受とめ閃りと鞍を乗らあむく再びかゝる薙刀を反かへし衝と入り引組く搦倒押へく索を掛りける當下刀野時夏ハやうをく身を起こし。遙よんれば達六ハ守詮を組れりかくてもいあぞ味方を續う。守詮が軍兵の間近く走來つ救ふべくもわらざるの間道は遠く逃去りかりし程は守詮ハ時夏を撃漏り遺恨かりくかたれ

とも二軍兵ハ二百は足らぬ。目よあまる敵と挑ニ戦ふ。あつて陣歿まきまあつた。とるひうへへ生拘を牽立させ大将の述を慕ふ。泉川をうらひ歩せ。これより敵へ追ひつゝ程は義兵の鎮守府は落しあり味方の兵を俟て。天明くあつて集會あり。五百餘名ことろ中よ城戸三郎守詮ハ隊の軍兵と一人も替せ。時夏が腹心の家隸矢塚達六を生拘来り戦ひの趣を告ふ。義兼感悦斜め。懸く守詮よ對面し。危急を救へる軍功を賞嘆し。御辺今度の勳記比類なし。莊司がみづくら来會して先鋒に進むともこのうへのうらあつて。それ慮足らぬ。時夏は欺れ家隸糠田重正ハさく士卒の陣歿半は過り。彼時夏の利口もよく奸智あり。それあつて。それあつて。渠の執権恩顧のりあり。

この故よ年来これに関けられ。夏遂よあつて及べり。獅子身中の虫といふべし。達六奴を拷問せ。彼奴が伎倆ハ分明あつて。いとく牽出し。いとく下知し。隨ふ守詮が士卒四五人索を取。生拘矢塚達六を牽出し。答を揚ぐ。打懲ら。主の刀野が野心の顛末責問。大くあつて。ね。達六苦痛堪せ。時夏が隱匿逆意を悉く首伏を第一に。経任が部下の偷兒早蠅五頭平は相譚れ。足利より鎌倉へ貢献。金銭巻絹を畧奪せ。赤貝の百姓苗四郎引太郎ホを破殺し。五頭平を救ひ。又五頭平を欺り。八島室平は牽連し。更吉見義邦を誣り。経任一味のよしを告訴し。義邦逐電。及びて時夏みづくら。これを追蒐。途よ五頭平が支黨あり。野伏ホを馳催し。勝沢やく追著。これに媼子并平は破



時夏

達六

時夏を射て守詮
 達六を擒ゆを
 平泉の敗軍様
 田重正戦死を



時夏

立られくほおをぬ遂げを賸藍玉院の弟子の女僧に柱られく井平を
 撃手漏一伎倆の發覚んみど懼まゝ室平を病床に益り五頭平を
 獄舎に毒殺せり。此徑任と舊交わりをりて時夏に敵に生拘られり
 然れども還く尊信饗應せられ更に徑任に相譚れ逃かへりて
 ありちして賊の為に詐の計を行ひぬ又義邦主後の逐電を箇様
 井平の箇様を義秀の箇様とこの四人の罪ありて罪人あり
 り流言をせざるまもも其その実を吐く義兼面色火のどく
 怒まる眼に血を沃たて平泉のくを疾視反賊時夏いふればかくれ
 如く毒悪ありれり彼奴を生拘る首を鎌倉に贈らば世の胡應は
 なんのと小勢ありとも推よせく勝負を一時に決まると馬を牽け
 兵どもと跳あがりて敦圍りての死老黨高階兵衛進とゆき主と

諫め寡をりて衆に敵にぞ死當然の道理を述るる初め敵に
 近より一圓国府へせりて再び奥羽の軍兵を馳催し
 後日の征伐あつべしと辞を竭し禁めりて義兼力及ば
 馳る国府へ退れり軍兵催促嚴重かれども寄るのくち負て
 賊に破竹の勢ひあつて守護郡司は戦慄れ催促は後八日とせ
 是る程は十一月より一日毎日雪降積りて人馬の馳引不自
 由に來春雪の解る比あぐ滞陣せん兵糧續りて義兼迷惑
 至極し竟に帰陣は一決し城戸三郎守詮由軍功の賞と
 ちて名馬一匹を牽祿と式待してどかへりて足利左馬介義兼へ
 十一月中旬は残兵七百餘騎を留りて国府を獲る月のをりて鎌
 倉に参著し執權時政の第にゆりて北條父子は對面し合戦利あり

ざりし時夏が舊悪逆心の為体又彼義邦廣光井平平の最
 時夏は誣られく已てとほむを逐電あつれど素より犯せる罪はな
 義秀が八島室平を投懲せしその友の爲にせしものと潔白の人を
 べんし又信夫莊司元晴が家臣城戸守詮が今度の働に彼とあ
 此と殺く巨細は告ぐ又いぬらう。この時夏が股肱の癖者夫塚達六が白
 状よりあつてちもあつて邪正あつたれう義兼不才短慮ゆて始終時夏は
 欺れ此度の大事を愆せり敗軍のめん答へ素より覺期のすれども
 今さう見恭に入らん面がせよといへと恥を隠さば非を飭らざ一五
 一十を述べし時政さう呆れ果つてくく義兼の顔とのと打
 まりつ肩揺揚く息を吐たあひたや時夏が逆賊は荷膽してこの
 辱めはあんとあつれれば此度の敗北は貴所一身の越度にあつた時政も

亦不覺之彼奴が親照時ハ荊婦の後弟ありくバ勲は憐愍の
 誠が仇となりけり一所詮生拘達六をくなく禁獄せし又貴所の
 褒賤ハ廣元ホと相譚あつてもくも執達まへ病後の心旁推察
 せり退りて休足あへと叮嚀は慰れば義時も亦情を告ぐ頻に
 嗟嘆あつたりかく次の日新將軍頼家卿ハ時政廣元ホが
 中よ任せ征東使足利左馬介義兼を営中よ召登り凱陣の候を
 のく見泰の勸盃あり軍旅の勝敗を問ごし帰國の暇どあつり
 々もバ義兼の恩を謝し執権父子は別を告ぐ足利へ帰城し只
 管は愧悶へく病著頻に再登り遂に逝去のまあり鑊阿殿と
 法号は嫡男義氏家督う義氏のうの後巻和田合戦の條にいん
 この下は話や一問詰休題足利義兼帰國の比北條江間義時ハ父

時政は密語を義兼敗軍の咎をたてて大人の塔をゆき誰か
 ざるものありん又彼吉見義邦の蒲殿の子白鳩丸ありし世に隠れり
 又媼子井平のちどめが家は仕りしもの主の首は違ふをりて下野へ追
 遣られし世にもさる怨あるものあり又朝夷義秀といふ猛者ハ出処
 定らざれども生れあぐの匹夫ゆあべりし世にこれの人々時夏は誣
 られく骨相書をめて索られしへあはれ死冤屈ありしや彼亦速く走り
 深く隠れく刑戮を脱れしへ自他の幸ひしをりて時夏主後が罪を倡て
 矢塚達六を由井濱は梟首し義邦廣光井平義秀ホが罪藉ハ冤
 いらりり赦免せし趣を國へ徇させあかしの如く行ひて大人の
 政事訟を定るは親疎具負の沙汰なりと世はあはれ民歎ん歎ん
 民後ふ後ふと死ハ仇寡しこれ安全の計策之照時が故をりて時夏は

この年来情を被ひしを渠逆賊と与せりしが彼は負くははれ
 彼が我を殺す之達六を梟首のり猶豫ありしをたてあはれびくよ
 諫し時政これに後ひく達六を誅戮し義邦ホ四人の罪犯冤に
 よろく赦免のりて國々縣田舎あぐ残る曲あり徇させたり信なる
 くの儒仏の教誨善の報ひあり悪の報ひあり天運循環
 ちると死ハ暗君も曉るとあり奸宰も枉る小あり義時が忠を賢人ハ
 身の利のあり揃るといへども併忠臣義士の誠を天神鑒る今この恩
 赦をあへるなるべし案下某生再説修羅五郎経任ハあひの隨は寄
 ちと破りし威勢あはれ奥羽を動し世はあはれものありとあはれ縁故
 時夏が不義の資は成るものあり亦忌ふれば死はあはれ後初のごとくは
 款待し度四天王ホが亞よとせりし終は一方の頭領より又彼淫婦

文字掬ハ経任ガ愛妾あれども時夏を釣人乃ハ霎時その枕席とぞ
 めさせも一これ今ハ要一カ野は後へ行くはと禁めたるを蕪塗鶉東二
 諫るのゆゆ此度数千の録倉勢と一戦は移走り其の皆是カ野
 太郎が功ハ拍軍何ぞ一婦人を愛惜し信と其部下ハ失ひからんや
 世間ハ女子多かり文字掬一人ハ限るべく只彼女子ハ初ノ如ク時夏
 与へ多うと死ハ恩を感じ情ハ引れてあかく用ひらんことを願ふべし
 りとの約を違へぬ恨く必変を生せん賢慮を施しあへと以経任
 びく頭をうら掉られは妾影あれども文字掬が如死ハ一汝ガ美人と
 稱はるものおつらやとうら笑へ鶉東二又ハゆゆのやと聞ぬらや
 信夫莊司元晴ハ一個の孫女ありその名を筐姫と唱做しり青春ハ二ハ
 うへハ過ば沈魚落馬閉月羞花の美人ありと縁竹のあふ詠歌の才

儔あつた人食いなり賀美乗原玉造磐井の四郡今ハ後とらもの
 只彼信夫莊司のこさづれ寄の敗北己来膽を冷しとさらんげん
 口より利ものどもと且試ハ筐姫を求め御覧へハ拍軍ハ義経の
 おん子ありと稱しと信夫莊司が後とられこれを真とらるもの寡し
 元晴拒る筐姫を与ると許さば又謀あり姫ハ信夫莊司が
 白髪首をも取りつべし賢慮いゆと真実とらる勸まハ大に歡び
 微妙も謨るものうねこれ彼筐とゆんがむを忘れし鬼六
 夫藤五ハ勇ありあれども才足らば甲しと擇んより汝彼処へ赴くべし
 支度をせよとのそぐせ鶉東二推辞氣色あけけりけりぬぬ某
 彼処へ赴くとも十ヲ九ハ元晴決しけり引べり後あれども一ハ
 彼処に到ると死ハその言語ハ就きその案内ハ就死後日ハ謀を移ふ

便ありその饋物の箇様々又從者如比くとありまは注文一次の日
 物より整く礼服の馬より跨り賊卒五人五荷の投爪を扛擔せ
 高館を望くいとがせり不題城戸三郎守詮の國府ゆく摠大將
 義兼は辞しこれ隊兵をゆる高館ある圓山の館に帰陣し
 合戦の勝敗時夏が逆心の夏之趣矢塚達六が白状より義邦
 以下の人々の罪あり頭然るなり自分の軍議異見ありと元晴
 義邦は告し元晴の吉見主従の敗北を風声より
 物々今又時夏が逆謀を巨細より遺恨は堪はぬわはれ守詮
 矢塚達六を生拘りわたり吾黨の冤枉ゆるく釋す今ら天日
 見ると三郎が賜ありと義邦も廣光もその歡び大なるを主従
 齊一席を起し守詮を再拜し義邦の帯よりる重代の刀を取

守詮よりへく元晴も亦その功勞を褒美し食禄を増す
 かく又義邦の元晴廣光とうち相譚ひ既に世間廣くわんふ
 この処よりを義秀あり世の信ありと恨られ彼人
 今あな旅ありとも越中なる稻向許消息せ傳へゆくとも
 あるべし廣光彼処へ趣くべしと心むり早れども時既に去冬の
 最中より北国の雪深く行客途を去あへば雪吹は撲れ雪
 崩れ埋られ死するもの多るは常はゆくといひ難美の時
 あり春を待とも遅れありと元晴只管制し遣らば義邦もあふ
 心よりわくあひく老人の議は後ひて廣光を禁りたりとくわらわどよ
 十二月の朔ありく駒形村の田丸標吉の養母の忌果後ト
 わく領主の館は泰りて義邦笹姫と婚姻の祝言を述置置黒秋

預られし沙金四十兩を齎し、廣光は遞与せし。義邦是を
笑く、うら笑ひ標吉、律美ある何ぞこの金よ及んや。これ對面は
とて元晴、由を告せ、翁、替列座し、標吉を召、近著義邦
あつその忠孝を譽、更ゆく件、沙金を賞、禄よとせ、又時夏、逆謀
達六が白状の趣を告し、久標吉、義邦の厄の釋んとほつと況
あく、沙金のあやも固辞すと、とて不敬あるべしと、廣光がゆめ
まをく、受納め、拜謝せり、當下元晴、含笑く、標吉、即れ汝を
ゆく、駒形村の長とや、他村の民を領、移さんと豫あり、あんどゆ
大敵、經任、鄰郡あり、境と成るとり、あまが、かろく、く、民を
動し、吉見、殿も世間、廣くあり、あん、汝が、館、苗りて、
この君、仕へよう。あつれ、駒形村、をもく、食邑、は宛、仍、ふ、の、こ、本、姓

馬、親、立、立、り、嗣、忠、と、名、告、れ、り、これ、は、二、人、の、子、共、嗣、信、忠、信、が、
判、官、殿、は、仕、り、忠、心、は、擬、は、つ、の、も、ら、う、を、ゆ、よ、と、説、示、せ、ば、標、吉、
あ、ま、く、感、悦、し、賢、息、達、の、片、名、あ、ま、く、あ、つ、ん、の、分、は、過、り、併、望、と
こ、り、面、目、これ、は、あ、ま、と、や、且、駒、形、の、宿、所、は、退、死、物、を、取、り、の、へ、て、あ、り、
んと、答、つ、て、速、侍、は、退、死、く、両、老、黨、昌、甫、守、詮、は、恩、を、謝、し、歡、び、を、述、
駒、形、村、へ、還、り、け、り、暫、し、く、水、草、十、郎、城、戸、三、郎、は、遠、し、く、主、の、や、と、り、へ
来、り、ゆ、め、や、平、泉、の、賊、徒、蘇、塗、鶺、東、二、暴、道、と、名、告、れ、る、の、經、任、が、
使、者、と、稱、し、く、美、酒、乾、魚、卷、絹、か、ど、影、齋、し、主、君、は、見、泰、を、乞、ひ、追、
退、け、ん、欲、擊、苗、の、ん、欲、と、い、ひ、元、晴、は、頭、を、傾、け、逆、賊、經、任、故、あり、
あ、ま、く、使、を、遣、し、物、を、贈、り、実、情、は、あ、ま、に、が、要、害、を、な、ん、為、あ、る、べ、し、これ、が、
と、く、教、ゆ、も、足、ら、ぬ、小、賊、亦、が、首、取、て、何、お、う、せ、ん、これ、出、會、せ、の、臆、は、似、たり、

冠者主後へ且く奥へ避かへそのれ召べと居あぐらも飾る成儀
 凛然騒ぐ氣色へあがりり現更の為体多ひ存死使者あれば
 廣光も詰まかづ次の間へ避けく様子と窺ふ程は執繼の若黨が
 運ぶ贈物へ白水の臺は白銀百枚練絹五十反綿五十屯美酒
 十壺乾魚の折櫃十五前処陝まで扛居たり程は蕪塗鶉東二
 暴道の若黨を導れく過る廊下も長袴袴取かぐら八方は
 配る眼光人を射く一癖ある死面魂佩る長剣は歩の運びを
 刺鞭身を切るごと死寒風はきのみの雪の素書院怯は臆せむ
 進み来つ元晴は長揮く東面の坐は著ぬ畢竟主客の問答
 如何そへ次の巻は解分るをんくあらん。

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之四終

